みたけが原便り

第１８回「君が憂いに我は泣き 我が喜びに君は舞う」

（１２月終業式講話より）

校長 坂本　晋

玄関ロビーに飾られている阿部央君の生け花もクリスマスバージョンに衣替えし、いよいよ令和２年が暮れようとしています。

年末恒例の流行語大賞は「三密」、今年の漢字は「密」でした。いずれも新型コロナウィルスにまつわる言葉で、この１年私たちがこの感染症によってどれほど振り回されたかが分かります。

「親密」という言葉がありますね。密には、「親しい」という意味もあります。これまでは、人間同士国同士いかに心と心を近づけて親しみ合っていくか、これが普遍的な一大テーマだったのに、それが１８０度転換してタブーとされてしまった。世界が大きな衝撃と混乱のただ中にあるのも頷けます。

本校も行事の中止や変更などを余儀なくされましたが、皆さんは落ち着いて冷静に対処してくれました。さすがは中央附中生だと思います。また本校の生活アンケートの結果を見ると、今年もまずは楽しく学校生活を送ることが出来たという人がほとんどでした。わたしはそのことを何より嬉しく思います。ただ、残念なことに１００％ではない。何人かの人は、友だちの悪口が聞こえてきたり、言われていやだなあと思う言葉を耳にしたことがあったと書いています。たとえば「シネとかバカとか」。これは、新年に向けて根絶しなければならない大きな課題です。

そこで、今日は初めに問題です。スマホとかインターネットなどで言われて、皆さんが「これは悪口かな？」と感じるのはどの言葉でしょうか？今から５つ云うのでよく聞いて下さい。

①真面目だね。
②おとなしいね。
③天然だね。
④個性的だね。
⑤マイペースだね。

もう一回云うので「自分だったら余り云われたくないなあ」というのを一つ選んで挙手を。

実は静岡県のある中学校の２年生に尋ねてみたら、一番多かったのが④の「個性的だね」だったんです。

私にとって「個性的」というのは褒め言葉なんですが、 他人と同じであるのが良いのだという同調圧力（無言の雰囲気）が強い中学生にとっては、「個性的」が悪口に聞こえてしまうというのは意外な驚きでした。

そして、違うことがともすると、学校生活の中でイジメにつながってしまう風潮があります。

さて皆さんはどう思うか？今日はそれについて話します。

イジメは「生き物」の世界には必ずある。金魚にも鶏にも猿の世界にもある。金魚鉢の中で追いかけられてばかりの金魚、鶏舎でいつもつつかれている鶏、動物園の猿山にはボスがいま

す。まして、複雑な心を持った人間ならなおさらそうなのかもしれません。

残念ですが、イジメは誰にでもどこでもありうること。しかし、だからといって認める訳にはいかない。特に附中にあっては、断じて許してはならない。

なぜいけないのか？それは、イジメが「卑怯」な行為だからです。

では、なぜ「卑怯」はいけないのか。それは、恥ずかしいことだからです。

何かを失敗したり、できなかったり、下手くそだったり、これは恥ずかしいことではない。しかし、「卑怯」であるのは、理屈抜きに恥ずかしい。

だってそうでしょう？皆さんも「自分は卑怯な人間だ」とは認めたくないし、ましてや、回りからは絶対そう思われたくありませんよね。それは「自分のことは棚に上げて人を貶めるのは恥ずかしいことだ」と知っているからです。

でも実は、自分はちっぽけな人間なんだとコンプレックスを感じている人ほど、身近な人を引きずり下ろすことで安心しようとします。その時、「待てよ！今の自分はみっともないぞ！」と公正に自分を見る眼を持たなければなりません。

本校にあって、たとえ軽い気持ちでもイジメが許されないというのは、学校は命の大切さを学ぶところだからです。学校は不完全な者同士で助け合い、「オマエ凄いな」と認め合いながら、一緒に向上していく場所なのです。

でも、時に気持ちがすれ違ったり、その気がないのに傷つけてしまったり傷つけられたりする、それを免れ得ないのも人間です。

だから逆に、それを過度に怖がって避けてばかりいれば、いつまでたっても心の距離は縮まらないし、親密にもなれません。

相手の心を思いやれずに、生の感情や乱暴な言葉を相手にぶつけたり、気持ちを逆撫でするような行動をわざととる、こういう人は（本校にはいないはずですが）、自分で自分をコントロールできないのですから、それはまだまだ幼い未熟な子供だという証拠です。だから恥ずかしい。かといって、逆に相手の反応を気にし過ぎて、自分らしさや個性を押し殺して相手に合わせて上辺だけの付き合いに終始しても、これも楽しくはありませんよね。

人間なのだから傷つくのは日常茶飯事だしお互い様です。気をつけるのは、こうしたら相手が傷つくかなと思ったらそれはしないこと。それでも「アッやっちゃったかな」と感じたら、すぐにゴメンと謝る。自分が傷ついてしまったら、引きずらないでサッサと気持ちを切り替えてなすべきをなす。すると、やがて傷跡のカサブタがはがれる度に、少しずつ本物の友情が育っていきます。

自分と違う人と友だちになれないかな！と普段から意識しましょう。違う人にはいろんな発見があるし、それが自分の成長につながります。ピンチの時こそ自分にない強さを持っている友だちが頼りになります。

違っていることは（顔も性格も得意科目も運動神経もみんな含めて）それが普通だし、それだから良いんです。お互いに長所も短所も認め合って、自分の足りない所をバックアップしてもらう。そこから友情の絆が生まれていきます。皆さんも「本当の友達ってナンダロウ？」とぜひ考えてみて下さい。

さて最後に、今日は「浜辺の足跡」という詩を紹介します。作者はアデマール・デ・パロスというブラジルの詩人です。「主」と出てくるのできっとキリスト教をモチーフにした詩かも。でもここでは宗教は抜きにしてよろしい。

皆さんは、「主」を自分にとって大切な誰かに置き換えてみて下さい。親友でもよいし、親や家族、ペットでも？。未来の恋人を想像するのもよいかもしれません。

「浜辺の足跡」/アデマール・デ・パロス

夢を見た、クリスマスの夜。
浜辺を歩いていた、主と並んで。
砂の上に二人の足が、
二人の足跡を残していった。
私のそれと、主のそれと。

ふと思った、夢のなかでのことだ。
この一足一足は、
私の生涯の一日一日を示していると。

立ち止まって後ろを振り返った。
足跡はずっと遠く
見えなくなるところまで続いている。

ところが、一つのことに気づいた。
ところどころ、二人の足跡でなく、
一人の足跡しかないのに。

私の生涯が走馬灯のように思い出された。

なんという驚き、
一人の足跡しかないところは、
生涯でいちばん暗かった日とぴったり合う。

苦悶の日、悪を望んだ日、利己主義の日、
試練の日、やりきれない日、
自分にやりきれなくなった日。

そこで、主のほうに向き直って、
あえて、文句を言った。

「あなたは日々私たちと共にいると
約束されたではありませんか。
なぜ約束を守ってくださらなかったのか。
どうして、人生の危機にあった私を
一人で放っておかれたのか、
まさにあなたの存在が必要だった時に」

ところが、主は私に答えて言われた。
「友よ、砂の上に
一人の足跡しか見えない日、それは私が
きみをおぶって歩いた日なのだよ」

こんな詩です。さあ、みなさんはどう感じたでしょうか。

もうひとつ、こんな言葉があります。

「君が憂いに我は泣き 我が喜びに君は舞う」

という言葉です。「君が憂いに我は泣き 我が喜びに君は舞う」。コロナに負けずに、こういう友達を作りたいものですね。

それでは、よいお年を。